

国際的に活躍できる研究者を どう育てるか

「看護学国際人育成教育プログラム」 から考える

ここ十数年のわが国の看護系大学・大学院の急増により、次世代看護職ならびに看護教育・研究職育成の数量的充足は達成しつつある。今後は大学・大学院の質的充足が大きな課題であるが、そのためには次世代教育を担う教育・研究者の育成、すなわち世界に通用する質の高い博士(前期・後期)課程修了者の輩出が、看護界全般の底上げには最も重要である。

わが国におけるこれまでの看護系大学院教育は、海外留学によって看護学修士・博士号を取得した教育・研究者と、主としてわが国の医学・保健学領域で修士号・博士号を取得した教育・研究者が、模索しながらつくりあげてきた経緯があり、まだまだ端緒についたばかりである。現在までに産出されている看護学修士・博士論文は、わが国の社会・文化的背景も含めた独自の看護ケアのあり方やその成果などを明らかにしているが、特に「質的、量的研究成果を国際的に発信する」「看護職の立場からのわが国の医療制度改革提言に向けた国際比較研究を実施する」ことなどを可能にするような論文が生み出される教育プログラム構築までには至っていない。

海外にも通用する一流の教育・研究者である「看護学国際人」として、新たな看護のあり方の提言を行なうことができ、医療行政、大学運営に関わるグローバルな素養と見識をも備えた修了生を育成するためには、国際的に通用する知識・技術・態度を体系的に教育する「アカデミックトレーニング」が不可欠である。

本焦点では、2008(平成20)年度に採択され、3年計画で実施中の大学院教育改革支援プログラム「看護学国際人育成教育プログラム」を紹介する。国際的に活躍できる人材育成をめざす「アカデミックトレーニング」を強化したプログラムからいくつかの取り組みを取り上げ、プログラムの概要と教育内容、期待される成果、海外大学との連携のあり方や国際共同教育研究への基盤づくり、さらにはプログラムを通しての大学院生の学びについて考える。

教育の成果を考える上では、プログラムの効果を、教育提供側の意図と学生側の学びの双方から捉えることが必要であると考えた。そこで本焦点においては、教育・研究者の教員の立場のみならず、大学院生の立場からの原稿も掲載することとした。本焦点が、今後のわが国の看護系大学等において国際的に活躍できる人材育成の推進に寄与できれば幸いである。

(企画：佐々木明子 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授)